様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 ２５ 日現在

機関番号：１４３０１
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2014～2017
課題番号：２６２８４１１４

研究課題名（和文）古代ギリシア・ローマ史における新しい「衰退論」構築に向けた統合的研究の試み

研究課題名（英文）Integrated Studies in the Decline Problems in the Greek and Roman Antiquity

研究代表者
南川　高志（Minamikawa, Takashi）

京都大学・文学研究科・教授

研究者番号：４０１７４０９９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　12,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、古代ギリシア史とローマ帝国史における「衰退」に関する議論を新たに構築することを目的としたものである。まず、ギリシア史・ローマ帝国史の両方で1980年代以降に台頭した「衰退」を否定する新正統学説の検証をおこなった。次いで、古代史の各分野で史料分析を進め、「衰退」と見なせる現象を読み取れるか否か、実証的に検証する作業を進めた。さらに、「衰退」現象にとどまらず、それがいかに語られ叙述されたかという問題に焦点を当て、イギリスのオックスフォード大学で国際研究集会を主催して討論した。最後に、東洋世界の衰退に関する問題とも比較検討して、新正統学説を越える「衰退論」構築への議論をさらに展開した。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this project was to construct a new standard of discussion on the decline problems in the Greek and Roman Antiquity. At the first stage of research, we examined the recent theories which had denied the decline phenomenon in the Hellenistic Greece and the Later Roman Empire. Then, we moved to the researches of historical sources and tried to examine the decline phenomenon which the traditional research had confirmed. We also paid much attention to the topic “decline narratives” and organized an international conference “Decline and Decline-Narratives in the Greek and Roman World” at the University of Oxford in March of 2017. At the last stage of this project, we compared the decline problems of both the Roman Empire and the Chinese Empire and tried to find an original and valuable way how to discuss the decline problems.

研究分野：西洋史学

キーワード：古代ギリシア　ローマ帝国　衰退　都市　心性

１．研究開始当初の背景

ローマ帝国史を専攻する研究代表者（南川）は、基盤研究（C）の交付を受け、後期ローマ帝国時代の研究をおこない、世界史上第 1 級の問題として長らく議論・叙述されてきたローマ帝国衰亡の問題を追究してきたが、その研究のごく初期に、1980 年代以降の学界でローマ帝国の衰亡が重視されなくなっていることを知った。衰亡に代わって社会の連続性が強調され、2 世紀の最盛期ローマ帝国時代から 8 世紀まで継続する、古代でも中世でもない「古代末期」(Late Antiquity)という時代概念が研究者の支持を得ていることも理解した。新しい学説を主導したのはP・ブラウン教授である。同教授の影響で、後期ローマ帝国時代の研究の力点は社会史や心性史に置かれるようになり、「ローマ帝国の衰亡」ではなく「ローマ世界の変容」が重要とされるようになった。

こうした「衰退論」の変容は、古代ギリシア史研究の分野でもほぼ同じ時期から生じていることを知った研究代表者は、問題点を明確にするために、2008 年 5 月に開催の第 58 回日本西洋史学会大会(於　島根大学)で小シンポジウム「西洋古代における『衰退』の問題」を主催した。このシンポジウムで研究代表者はローマ帝国に関する議論を担当し、古代ギリシア史の議論はそれを専攻する橋場弦氏(東京大学)に主導を委ねたが、シンポジウムとその後の報告書作成を通じて、古代ギリシア史とローマ史に共通する研究の問題点や背景を見てとることができた。そのため、いっそう広範囲で精緻な研究を実施する必要を感じるようになった。

研究代表者は、伝統的な衰退論を退けた 1980 年代以降の諸学説、諸研究には、20 世紀後半特有の時代背景があり、また検討すべき多くの問題があると認識した。例えば、ローマ帝国の衰亡に代わる新概念「古代末期」を支える価値観（古典期の文化と同じく古代終焉期の文化にも独自の評価を与えるなど）には多文化主義の影響が指摘されていた。また、社会の連続性を重視するあまり、新しい正統学説は変化の様相を見て取る努力を充分していない点も指摘できた。ギリシア世界ではヘレニズム時代、さらにローマ帝国支配下でもなおもポリスが変わらず継続しているとみたり、ローマ世界では民族移動後においても同じタイプの社会が継続していると強調したりすることになってしまい、変化を捉える歴史学の機能を果たしえていないことが判明した。研究法を見ると、1980 年代以降の諸研究は政治的な動き、歴史上の出来事を議論から遠ざけてしまっていた。そのため、社会史や心性史、宗教史の研究成果と政治史とが接合されていないという難があった。研究代表者は以上のような問題点を認識した。

21 世紀に入って、ローマ帝国史研究の領域では帝国の滅亡を強調する議論（P・ヘザーの大著など）が再び登場してきたのは注目できるものの、それらは逆に政治史に重きを置きすぎている恨みがあった。研究代表者自身は、その点を勘案し、ローマ帝国の衰亡に関する独自の叙述を『新・ローマ帝国衰亡史』(岩波新書、2013 年 5 月出版)でなしたが、政治史中心の叙述にとどまり、帝国住民の「こころ」の変化まで深く論ずるところまではいけなかった。さらに広範囲な研究の摂取と政治史との接合が必要と実感した。

本研究の企画にいたった事情と背景は、以上の通りである。

２．研究の目的

古代ギリシアのポリス世界は、紀元前 4 世紀にマケドニアの支配下で独立を失って衰退したと長らく説かれ、ローマ帝国についても、4 世紀後半に国力が衰退し民族移動によって西ローマは滅亡したと理解されてきたが、かかる衰退論は 1980 年代以降、変化よりも連続を重視する学説の台頭によって急速に力を失った。しかし、「衰退論」のこの変化には 20 世紀後半特有の時代背景があり、新しい正統学説も問題点を抱えていた。本研究は、政治史と社会史、宗教史と心性史など現在未接合の関連分野を統合して実証的に関連の諸現象を検討し、衰退をめぐる議論を新たな水準で構築するとともに、学説変化の背景や議論のあり方を深部で捉え返す作業を通じて、古代ギリシア史とローマ史に共通する研究の現代的意義や今後の課題を明確にすることも試みようとしたものである。

本研究の主題はヨーロッパ的性格の濃厚な問題であり、アジアの研究者の観点から分析しその成果をヨーロッパ人研究者に提示し意見交換するに適したテーマであると考えた。それゆえ。本研究の遂行と成果の発信を通じて、日本人西洋古代史研究者に相応しい見解の提示を試みるとともに、日本の古代ギリシア・ローマ史研究の現代的意義を明示することも、間接的ではあるが研究目的に含めることにしたのである。

３．研究の方法

本研究は古代ギリシア史とローマ帝国史における衰退に関する議論を新たに構築することを主眼とするが、それにとどまらず、かつて古典古代として欧米では高い価値を与えられてきた古代ギリシアとローマという時代を、「衰退」論を基点に、21 世紀の今日いかに理解し歴史的意義を与えるかについても、非ヨーロッパ圏の研究者として明確にすることを目指している。そのために、下記の（１）～（４）のような研究の方法をとった。

（１）研究の最初の段階において、1980 年代以降の新正統学説の検証をおこなった。ギリシア史分野の主な担い手である G・ゴーティエ、M・H・ハンセン、P・ローズらの成果と問題点、コペンハーゲン・ポリスセンター

の達成点などを明確にしようとした。ローマ帝国史についても、P・ブラウンら「古代末期」学派の成果を改めて精査した。論著だけでなく、研究者の世代、受けた教育、研究経歴など広範囲に調査し、「衰退」否定の見解の正統学説化を欧米における一つの現象として広い視野で捉えることを試みた。

（２）次いで、西洋古代史の各分野で史料分析を進め、衰退に関する議論の実証的な基盤を形成することを試みた。衰退と見なせる現象を読み取れるか否かが、概念の検討を含めて課題となるが、議論を単純化せぬよう、政治・経済だけでなく、当該時代の人々の「心のありよう」を重視し、実際に日常生活や心性、その変化が政治過程に影響しなかったのか、あったとすればどのような性格のものであるのかを明確にしようとした。ポリス世界とローマ帝国双方について、意図的に政治史と住民の「こころ」を扱う分野の研究の接合を試みようとしたのである。

（３）研究史把握と分野統合作業を踏まえた後、新しい衰退論の議論の枠組みを形成する作業にはいった。そして、「衰退」の実相とともに議論の新たな構造が明らかになったので、中間報告の段階ではあったが、それまでの成果をもとにしてオックスフォード大学で研究集会を主催し、ヨーロッパの古代史研究者の意見を聞き討論する企画を実践した。議論の独自性を検証し、新しい正統学説を越える「衰退論」構築へと向かうためであった。

（４）（３）で記した作業を経て、21 世紀に相応しい新たな「衰退論」を基軸とする研究の方向性をまとめることとした。また、最終段階で、東洋、特に中華帝国とローマ帝国との「衰退」問題についての議論を検討するという比較史的方法も導入することにした。

４．研究成果

研究の最初の段階では、研究代表者と研究分担者が、分担している専門領域で研究史を検討し史資料を分析する作業を進め、その成果を、研究会を開催して検証したが、研究史の把握が相当程度進展し史資料の分析が本格化した頃より、共通研究テーマの模索が始まり、研究の第 2 年目の終わり頃には、最初の研究集会を開催するところまで進むことができた。

この研究者集会は、京都大学を会場とし、第 3 回古代史研究会春季研究集会におけるシンポジウム「古代ギリシア・ローマ世界における衰退と衰退叙述」として開催した。その第 1 部は「過去と現在を比較する」と題し、研究分担者の南雲泰輔がローマ帝国末期・初期ビザンツ帝国時代に関する実証研究の成果を披露、第 2 部は「衰退叙述/言説の構築をめぐって」で、どのように衰退が語られたかを検討するため、研究協力者の岸本廣大がローマ帝国下におけるギリシア世界のケースを論じた。さらに、衰退の「語られ方」の究明を進めるため、第 3 部「衰退叙述/言説と他者」では、研究分担者の桑山由文が,ローマ帝国統治下のアテネを取り上げて報告した。このように、「衰退」問題に関する研究史・学説史の批判的検討を済ませて実証的な検証を進めつつあったこの研究集会の時点で、「衰退」の問題の史資料に基づいた検討と並んで、「衰退叙述」「衰退言説」の有り様の検討が非常に大きな課題となった。そのため、共同研究はこれを中心課題として進めることとした。そして、その研究成果を、2 回目の研究集会で発表することをめざした。

本研究は、「研究目的」に記したように、国際発信することをめざしていたので、第 2 回目の研究集会はヨーロッパで開催することを当初より計画しており、その目標通り、第 3 年目の年度末の 2 日間、イギリス、オックスフォード大学ウルフソン・カレッジを会場として研究集会を開催した。

この国際研究集会には、科研費共同研究メンバーに加えて、イギリス国内、さらにドイツとアメリカ合衆国からも報告者を招いた。また、オックスフォード大学だけでなく、ロンドン大学、ケンブリッジ大学の教員や関係者も参加してくれ、当該研究テーマに関するイギリスの重要な研究者が大勢集まったので、報告も討論も非常に充実したものとなった。テーマは、「古代ギリシア・ローマ世界における衰退と衰退叙述」とし、第 1 部「古代の衰退に関する現代での叙述」、第 2 部「古代における衰退叙述の形成」、第 3 部「比較史的アプローチ」として、各部に 3 報告と 1 コメントを配した。個別の報告に関する質疑とコメントを聞いた後、全体討論をおこなったが、ローマ帝国終焉期の理解に関しては、イギリスの EU 離脱にも絡めて現代ヨーロッパの状況分析にまで議論が及び、研究活動や歴史解釈と現実政治との関係について参加者の注意を喚起した。

この国際研究集会の後、研究代表者は報告者、コメンテータから改訂を加えた原稿を集めて編集し、全文英文の報告書 Takashi Minamikawa(ed.),*Decline and Decline-Narratives in the Greek and Roman World: Proceedings of a Conference held at the University of Oxford in March 2017*, Kyoto University,2017 として刊行した。

最終年には、これも計画通り、西洋古代の「衰退」問題と東洋、特に秦漢帝国のケースとの比較史的考察を実施した。

4 年間にわたる本研究の成果の最も先鋭な部分は上記の英文の報告書にまとめられており、個々の研究者の活動の記録も、開設したホームページにおいて、年度ごとに報告されている。その要点のみ記せば、以下のようになろう。

研究代表者の南川は、共同研究全体を統括し、研究集会の準備と運営をおこなったが、専門分野においては、これまで手を付けてこなかったローマ帝国が帝国機能を喪失した

後の時代、5 世紀の後半まで射程を広げて時代の概括を試み、その一部については立ちいて考察もおこない、その成果を一般的な歴史叙述として編著にて提示した（2018 年 6 月末刊行予定）。

研究分担者の研究は以下のようであった。まず、栗原麻子は、前 4 世紀のアテナイを素材にして研究し、衰退言説が同時代人や後世の歴史家による規範的な時代の創造と切り離せないことを、法廷弁論などを用いて指摘した。長谷川岳男は、ヘレニズム時代のギリシア人の世界にある衰退問題を考究し、とくにメンタリティの変化に注目するとともに、ヘレニズム世界のローマ帝国への接続を重視して、「グローバル化」という概念の使用可能性を検討した。井上文則は、西ローマ帝国の滅亡後の地中海を囲む世界と魏晋南北朝時代の中国についてその歴史叙述を比較する作業を実践した。藤井崇は、前 3 世紀末から前 2 世紀半ばにかけてのヘレニズムとローマとの関係などを研究した。桑山由文は、ローマ共和政末期から帝政前期にかけてのギリシア本土について「衰退」の問題を取り上げ、それを多様な「他者」がいかに見たのかを考察するとともに、地中海の東西地域における植民市の建設についても、衰退言説と絡めて研究した。南雲泰輔は、最新の「古代末期」論の動向を把握するとともに、ローマ帝国衰亡期に帝国東部がいかなる新しい世界秩序を形成していったかを研究した。最後に、阿部拓児は、古典期ギリシアの歴史叙述に現れる衰退の歴史観を研究し、とくにギリシア史学史におけるペルシア史叙述の伝統を解明する成果を上げた。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）
① 桑山由文、アウグスタ=エメリタの創建とその影響―アウグストゥス帝期のイベリア半島南部、西洋古代史研究、査読なし、17 号、2017、55-71

② 長谷川岳男、ヘレニズム世界の歴史的意義について―ギリシアとローマの間で―、関学西洋史論集、査読なし、41 号、2018、17-28

③ 阿部拓児、クテシアスとヘロドトス―ギリシア史学史におけるペルシア史叙述の伝統―、洛北史学、査読あり、20 号、2018、95-120

〔学会発表〕（計２件）
① 南雲泰輔、西洋古代史の時代区分と「古代末期」概念、第 85 回西洋史読書会大会、2017 年 11 月 3 日、京都大学

② 長谷川岳男、ヘレニズム世界の歴史的意義について―ギリシアとローマの間で―、関学西洋史研究会第 20 回年次大会、2017 年 11 月 18 日、関西学院大学

〔図書〕（計３件）
① Takashi Minamikawa(ed.), Kyoto University, *Decline and Decline-Narratives in the Greek and Roman World: Proceedings of a Conference held at the University of Oxford in March 2017*, 2017,144 (南川高志、長谷川岳男、栗原麻子、井上文則、阿部拓児、藤井崇　他執筆)

② 南川高志　編著、山川出版社、BC220 年 帝国と世界史の誕生、2018、270
（南川高志、藤井崇　他執筆）

③ 南川高志　編著、山川出版社、378 年　失われた古代帝国の秩序、2018、296
（南川高志、南雲泰輔　他執筆）

〔産業財産権〕

○出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
https://sites.google.com/site/kodaisekaisuitai/home

６．研究組織
(1)研究代表者
南川　高志（MINAMIKAWA, Takashi）
京都大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：40174099

(2)研究分担者
栗原　麻子（KURIHARA, Asako）
大阪大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：00289125

長谷川　岳男(HASEGAWA,　Takeo)
鎌倉女子大学・教育学部・教授
研究者番号：20308331

井上　文則(INOUE,　Fuminori)
早稲田大学・文学学術院・教授
研究者番号：20400608

藤井　崇(FUJII,　Takashi)
関西学院大学・文学部・准教授
研究者番号：50708683

桑山　由文(KUWAYAMA, Tadafumi)
京都女子大学・文学部・教授
研究者番号：60343266

南雲　泰輔(NAGUMO, Taisuke)
山口大学・人文学部・講師
研究者番号：70735901

阿部　拓児（ABE, Takuji）
京都府立大学・文学部・准教授
研究者番号：90631440

(3)連携研究者
(　　)

研究者番号：

(4)研究協力者
クリストファー・ケリー（KELLY, Christopher)
ミーシャ・マイヤー(MEIER,　Mischa)
西村昌洋(NISHIMURA, Masahiro)
岸本廣大(KISHIMOTO, Kota)
山下孝輔(YAMASHITA, Kosuke)
杉本陽奈子(SUGIMOTO, Hinako)
増永理考(MASUNAGA, Masataka)